

3 〈私〉はどこへいく？ 黒崎政男

■凡例

- 1 ●は、本文。①②…は形式段落番号。◆は、設問。
- 2 ▽は、本文の追跡・分析。(解答例だけではなく、ここをこそ、読む。)
- 3 ▼は、読解に関する技法。
- 4 ☆は、記述に関する技法。

■前提 『現キー』で確かめよ。▼第五章「哲学・心理」の概説!

・デカルト:「我思うゆえに我あり」 近代的な「私」(理性・精神・内省)

精神/物質、心身二元論、近代的自我

■追跡

① ●二十一世紀はデジタル・テクノロジーによるパノプティコン(一望監視装置)の時代であると考えることができる。

▽第一文から論の方向をつかむ感覚を養ってほしい。この一文、ちょっと見ただけでは、なんのこっちゃや?という感じがするだろう。しかし、よく見ると、構文は「二十一世紀…:…の時代」という形で、シンプル。では次のこの「デジタル・テクノロジー」ってなんや? 思い浮かぶのが、コンピュータだのインターネットだのという技術。「パノプティコン」は聞いたことのない人が多いだろうが、「一望監視装置」という日本語がついているので見当はつく。カギになるのは「監視」だろう。となると、この一文はおよそ、これからはコンピュータだのインターネットだのという技術による監視の時代になる、といっているのかな、と見えてくる。私たちはここで、「では、いったい、だれが、だれを、どんなふう(なんのために)監視するんやろ?」と思うだろう。これが、文章を読んでいく動力となる「問題意識」だ。読み手は、文章の初めのほうで、書き手の問題意識に自分をすりあわせていく必要がある。今まで、一度も「〈私〉はどこへいく?」とか「監視はどのように行われるか」なんて考えたことのない「おれ」や「あたし」も、ここはひとつ、書き手の声に耳を傾け、その視線につき合っていかななくてはならない。

▼論の方向をつかむ。

●それは「意識する私」(主体的に判断する私)「私の思惑」を超えて、第三者的に見られた私の行為、私のあらゆる行動が電腦空間に記憶・蓄積されることによって成立していく。

▽「それ」とは? 「デジタル・テクノロジーによるパノプティコン(一望監視装置)

の時代」だろう。つまりこの文は、「そういう時代(社会)は、…:…することによって、成立していく」という構文になっている。では、どうすることによって? 次のように印をつけて整理するとわかりやすい。

「(第三者的に見られた)私の行為||私のあらゆる行動」が「電腦空間に記憶・蓄積されること」によって

私個人のあらゆる行動が、ネット空間に記憶されていく、というふうに取り扱ることができれば、この文章が想定していることが具体的に理解できるだろう。たしかにネット空間にアクセスしておこなったことはすべて記録されている可能性がある。検索システムは確実にそれらを収集する。個人情報やメールの記録も管理者(サーバ内)に残っている。そうか、そういう事態を指して、「監視」が可能な時代だといっているのか…。

ここで、「意識する私」(主体的に判断する私)「私の思惑」とはなんだろう。これはふつう「私」と思っている「私」、たとえば「あなたはどこう思う?」と問われて答えているこの「私」のことだろう。私がどう思っているかということを超えて、ということとは、私の、監視してほしくないといった「意思」や「思惑」とは無関係に、監視はなされていく、ということだ。

▼構文の整理。具体例による理解。

② ●電話の通話記録、クレジットカードやATM使用、街中の監視カメラなど、「私」の行動は今日、電腦空間に記録され蓄積されている。デジタル時代は匿名性を許さず、むしろ管理・監視こそ、その特徴である。

▽たしかに犯罪が起れば警察はそれらを参照する。現在、これらのものがない社会は想像しにくい。その他、インターネット上で買い物をする、何を購入したかの記録が自動的に収集されるシステムも日常的なものとなった。さらに、何を検索したかの記録が収集され、その傾向に応じた広告が、その個人に提示される。

▼具体例による理解。

●M・フーコーは『監獄の誕生』において、完全な監獄の建築モデル「一望監視装置(パノプティコン)」に言及している。それは囚人を一望できるように設計された円形の監獄で、看守は施設の中央塔から囚人を常に見ることができ、逆に、囚人は自分がいつ看守から監視されているのかを知ることができない。誰かにいつも見られているかもしれない、という意識は、その視線を内面化させ、囚人のうちに◆第二の看守が生まれ、結局、囚人は自ら従順な「主体」に変容する。このパノプティコンは、近代的な権力の「監視」様態を象徴するものであるが、…

▽パノプティコン(すべてを(pan-)見る(-opticon))は、功利主義の思想家ベンサム(十八世紀・英)が構想した刑務所の監視装置。監視されているときは、きちんとやるが、見られていないときは、いい加減に行動する、というのが人間というもの。しかし、権力側(監視する側)から見れば、二十四時間、すべての人間を監視するわ

けにはいかなから、監視していなくても、自主的に、権力にとって都合のよい行動をとってくれるようになるのが好ましい。囚人というのは、もともと社会のルールを破った者たちであるが、ベンサムは、「一望監視装置」のついた監獄で生活させることによって、囚人たちの内面に「社会のルールに従う私」を育てようと構想したのである。

ミシェル・フーコー（二〇世紀・仏の思想家）は、「このパノプティコンは、近代的な権力の「監視」状態を象徴するものである」と考えた。監獄に限らず、近代的な権力（国家など）の作りあげた装置は、すべて、この「誰かにいつも見られているかもしれない」という意識を利用して、自分から権力に従う人間を生みだしてきた。フーコーがいうには、軍隊、学校、工場、精神病院には、この監獄と同じ原理が働いている。

▼知識による補足。

問1◆「第二の看守」とはどのようなものか。（比喩表現の説明）

★切り身の方法

二つの部分に分けて考えよ。すなわち、「第二の」「看守」。 「看守」とは、囚人を監視する人間である。これが「第一の」、つまり普通の意味での「看守」である。では、「第二の」とはどういうことか。それはどこにいるのか。それはだれを監視するのか。答えはこうだ。第二の看守は、「囚人の意識の中に」いて、「囚人自身の行動」を監視する。これは、結局、囚人側から表現すると、自分の意識が自分の行動を監視している、という状態のことである。つまり、「解答例」自分の行動を監視している自分の意識、これが「第二の看守」である。

●社会学者M・ポスターは『情報様式論』で、夢想にすぎなかったパノプティコンの機能は、今日、情報通信テクノロジーによって完全に現実化するとして、それを「超パノプティコン」と呼んだのである。

▽「監視者は一箇所にいながらしてすべてが見える」というのがパノプティコンの理想であるが、実際にはすべての個人の行動をつかまえることはできない。しかし、現在の情報通信テクノロジーは、あらゆる個人の行動を記録・蓄積できる可能性を秘めている。個人がテクノロジーに依存した生活をすればするほど、その可能性は高まる。想像してみよう。スマホや携帯からの発信地点がすべて記録され、あなたは今日何時にどこにいましたね、と情報がフィードバックされるとしたら…。実際、子どもや老人を守るためのセキュリティシステムには、そのような機能が付いている。

▼変化。

③ ●この場合、もっとも重要な点は、監視が現在形の監視から、蓄積された情報に（遡る）監視へと変化した点であろう。

▽「もっとも重要な点は」＋▼変化、をチェックせよ。「現在形の監視」から「蓄

積された情報に（遡る）監視」へ、の変化をチェック。

※『現代文キーワード』読解ツール8「時間・時代の変化」参照。

「蓄積された情報」および「さかのぼる」とは具体的にはどういうことか、自問せよ。↓問いを保ちつつ、次の一文へ。

●〈私〉のあらゆる行動、行為が電腦空間のここかしこにデータベースとして遍在していく。ほとんどは沈黙したまま沈黙しているが、何らかの意図でそれらを寄せ集めれば、〈私〉についての驚くほど膨大で詳細な情報が、瞬時に組み上がる。

▽何年何月何日何時何分、○銀行○支店1号端末機から○万円引き出し。同○分、○丁目付近から○氏へメール発信、同○分同氏より電話受信、発信時間○分……。こういった行動記録の「寄せ集め」が可能だということである。もちろん、現在、自動的に全領域の個人データを集約するシステムはないが、技術的にはやろうと思えばできる。犯罪捜査のケースはその典型である。※一度「名寄せ」という語をインターネットで検索してみるとよい。

▼具体例による理解。

④ ●デジタル世界において私とは何か。それは、電腦記録を集大成した、その蓄積としての私が私であって、私が主体的にどう考えているかとか、私の意識といったことは別な〈私〉が成立している。

▽問↓答。▼「とは」定義語。デジタル世界における「私」⇨電腦記録を集大成した、その蓄積としての私。▼nota.butB。Aではなく、Bだ、あるいは、AよりはBだ、という区別の論理を捉えよ。これは、微妙な、しかし、大切な区別をしたときに使われるから、ピンと来ないときは特に慎重に、「×」「○」をつけて区別しつつ読み進めるのがいい。注意。ここでの○×は、よい・わるい、という区別ではない。論旨の中心（書き手が提示したいこと）はどちらか、という区別である。×私が主体的にどう考えているか。×私の意思。

●それは行為することが観察された私、であって、そこでは私の意識より、身体性のほうがフォーカスされている。このような変化は確実に起こってくるだろう。

▽nota.butBの続き。あんなことしたね、って観察され、記録されたもの。それが、私（⇨電腦記録が集大成した、その蓄積としての私）。私の意識じゃなく、私の身体がしたことが私。デジタル世界においては、身体性に焦点（フォーカス）が当たっているということだ。この変化は、これからさらに進んでいく。

⑤ ●バイオメトリックス認証においても特徴的だが、パノプティコン問題においても、モノとしての身体が私、意識としての私より、はるかに雄弁であり、確固としたものであるということが示されてくるだろう。

▽nota.butBの続き。○モノとしての身体が私。×意識としての私。私は誰か、ということを確認するときに重要視されるのは、指紋や目の虹彩だったり、集大成され

た行動の電脳記録だったりするといふのである。私が意識しているといふこの事実だけは疑えない確実なものだ、と考えたデカルトの「私」の確実性は、いまやかえりみられない。私とは私の意識だ、という時代は終わった？

⑥ ●もし【読解1】二十世紀的な発想の枠内にとどまることができれば、それは次のような発言になる。

▽ここは、このあとに続く文脈を予想させる。予想できるだろうか？ 「もし：ならば、…である。しかし、…」展開の動きをかぎつける論理的運動感覚を身につけよ。

▼論理的運動感覚。ボールの転がる先を予想するように！

●疎外してきた身体の言うことに耳を傾けよう。神経系拡張のネット時代にあつて、身体を置き去りにしてはならない。生命としての身体をながしるにすることで、仕返しされるのだ。心身二元論を超えて、失われた身体と私との調和が図られなければいけない、云々、云々。これがおそらく二十世紀的な、私と身体をめぐる発想の枠であった。（これはこれでももちろん達成・実現されているわけではないし、これは引き続き充実されていかなければならない。）

▽「鍵語」「疎外する」⇨自ら仲間はずれにする。「私とは、私という意識である」という考えに支配されてきた近代（デカルト）二十世紀）、意識を重視する余り、身体を軽視し、もともと自分の一部なのに（仲間はずれ）にしてきた。そのような「頭でっかち」な状態への反省から、「身体を大切にしよう」という議論は繰り返し語られてきた。たしかにここ二十年ほど、教科書や入試問題でもよく取り上げられてきた主題である。この文章は、それらのさらに先にあることを論じようとしている。

※『現代文キーワード』頻出テーマ2「身体論」を必ず読むこと。同じく「心身二元論」の項も読むこと。意識・主体⇨無意識・身体。

⑦ ●しかし、二十一世紀の現在、私と身体をめぐる問題は、これだけにどまってはいない。むしろいま述べてきたような、身体による私の疎外という、思いもよらなかったような時代が進行し始めているのである。

▽論理としては、not A, but B。×意識による身体の疎外（近代）。○身体による私（＝意識）の疎外（これからの時代）。正確には not only A, but also B。Aという問題だけではなく、むしろBも。

⑧ ●つまり、これまで私を私として決定づけてきた（デカルト以来の二十世紀後半の生命倫理にいたる）私の内面、主体的に行動する私、自分に責任を持つ私は、もしかしら二十一世紀においては、デジタルの眼を通して見られた私の身体によって裏切られ続けることになるのかもしれない。

▽「つまり」要約的ないいかえ。変化の確認。×（これまで私を私として決定づけてきた私の内面）・（主体的に行動する私）・（自分に責任を持つ私）ではなく⇨○（デジタルの眼を通して見られた私の身体）。

※生命倫理とは、究極的には、自分の生死は自分で決定できるという倫理。

⑨ ●誰が身体に聞くのか。私なのか、デジタルの眼なのか。いずれにしても二十一世紀は、「私と身体」が思いもよらなかった相貌で立ち現れ始めていることだけは確かなことなのである。

▽「誰が身体に聞くのか」というのは、誰が監視（私を見る、聞く）するのか、ということである。権力なのか。内面化された第二の看守（自分を監視する自分）なのか。または違うものなのか。その答えはここでは示されない。

ここでいったん「二十一世紀は、「私と身体」が思いもよらなかった相貌で立ち現れ始めている」という、ここまでの議論の到達点が示される。議論の小休止と、新たな問いかけ。

▼問いの確認。

⑩ ●「身体（の）疎外」というとき、普通は意識や心が「身体を疎外」するわけである。意識中心のデカルト的な「私」においては私の意思のほうが重要で、それが身体を疎外してきたから、身体を回復しようということだ。

▽⑥での議論の繰り返し。

●しかし「身体（の）疎外」という表題の（の）は、主体を表す「の」だ、と考えれば、これは身体が私を疎外していくという意味にとれる。デジタルの眼と合体した私の身体は、私を結果的に疎外していくという構造になっているのである。

▽身体（の）疎外⇨1意識が身体を疎外、2身体が私を疎外、という二通りの解釈ができるというのだ。「デジタルの眼と合体した私の身体」が、（私）を疎外していくとはどういうことか。「あなたの身体と行動の記録はこういうものですよ。あなたとはこういうデータの集積なんです」と（デジタルの眼と合体した私の身体）は（私）にいつてくる。（私）は何か違うと思っても、その事実を受け入れさせられる。（私）は自分自身（の）身体・行動）によって、おまえはこうだ、と定義されたあげく、「そうじゃないんだけどなあ」と仲間はずれにされたような気持ちになるわけだ。

⑪ ●たとえば、脳科学の進展にはすさまじいものがある。いま脳科学が目指しているのは、私の意識内容や判断内容を外側から脳反応として見ることである。さまざまなテクノロジーを使って、リアルタイムで私の脳の状態を見ることによって私の意識を測ろうという方向へ急激に進んでいる。

▽新たな具体例。意識を外から見る。だれが見る？（私）じゃない。（私）は見られている。テクノロジーに。

⑫ ●脳は物質、身体の一部であり、脳という身体を見ることによって、私を測ろうとするということである。だから、本当に逆転なのである。私が身体を支配し、疎外する、そんな「私」が主語ではなく、（デジタルの眼を通した「身体」が主語に

なり、〈身体がデジタルの眼と結託して〉主導権を握っていく。そういう時代に入りつつあるのかもしれない。

▽ notA, but B. 論旨自体は、⑩の〈デジタルの眼と合体した私の身体〉が〈私〉を疎外していく、と同じ。議論は停滞気味？（思考しつつ筆を執っている感じがする）。

⑬ ● aこのように考えてくると、従来の身体をめぐる諸問題とはまったく別の位相のものが現れてきているといってもよい。bもちろんそれはそれとして、とりあえずは、失われていく私、二十世紀的な意味での身体との対話、復活を徹底的に行っていかなければならない。aしかし、問題はそこだけにはとどまらない。興味深いといえれば興味深い、考えもしなかったような次元が登場しつつある。

▽ 第一文と第三文（a）は同主旨。⑨の「私と身体」が思いもよらなかった相貌で立ち現れ始めている」とも同じ。第二文（b）は、⑥の「これはこれでももちろん達成・実現されているわけではないし、これは引き続き充実されていかなければならない」と同じ。以前の主旨の繰り返しはよくあることだ。同主旨であることを確認すること。

⑭ ● それは科学テクノロジーの完全な勝利への道なのか、すべて一人称を三人称に還元しつくすという近代思想のハイパー延長なのか、そもそもまったく次元が違うことなのか、なんともまだ命名しがたいが、恐ろしくも興味深い事態が起こっていることだけは確かである。

▽ 「思いもよらなかった相貌・まったく別の位相・考えもしなかったような次元」と表現されてきたことの中身について、書き手はそれをまだ確実なことばで言い当てることはできないことを示している。〈科学テクノロジーの完全な勝利への道〉とは、たとえば、先の「デジタルの眼」があたかも神のように〈私〉の脳の中も含めて、世界のすべてをとらえるというようなイメージか。〈すべて一人称を三人称に還元しつくす〉という近代思想の〈過度の延長〉とは、主観的なもの（一人称）を排除し、客観的なもの（二人称）で社会を構成しようという近代の発想が極端に推し進められた結果、〈私〉すら客観的なもの（テクノロジーとか）だけでとらえようとするようになることをいっていると思われる。⑨と同じ「…だけは確かである」という文末。（※理性的な主体が科学・技術を推進してきたが、もはや、科学・技術が主体を追い越してしまつた、というイメージ。）

⑮ ● そこにおいては、私が行う拒否、私の否定は◆なんの意味もなさないことを、われわれはもう知っている。それはパノプティコン、見えざる機械がすべてわれわれをアイデンティファイし、拒否し、許していくような、見えない権力装置、見えないシステムである。私の思いや判断内容は、私の身体の一部である脳反応を計測することと同値になり、私とは何か、はパノプティコンの眼によって記録され蓄積された私のデータベースのことである、といったように。

▽ そこ||われわれについて、おまえとは、こういうやつだと定義し、（あるときは）

拒否し、（あるときは）許す、見えない権力装置、見えないシステムが支配する世界。

問2◆「なんの意味もなさない」のはなぜか。

★問いの変換。「なぜ」↓「どのように」といったん問いを変換する。

「この見えないシステムの中で私が拒否したとしたら、どのようになるのか」。

このように問い直すことによつて、どのように答えればいいのかが見えてくる。〈私〉が何事かについて判断し、それを拒否したとしたら？ そのとき、このシステムの中では「私の思いや判断内容は、私の脳の反応を計測することと同じことになる」。私が行う拒否という行動は、パノプティコンの眼によつて〈私〉のデータベースに記録されるだけのことである。

〔解答例〕私が判断して拒否したとしても、その行動は発達したデジタル・テクノロジーによる監視装置によつて、私のデータベースに記録・蓄積されるだけだから。

⑯ ● しかもそこで決定的なのは、ある特定の人間がその支配者になっているのではないということである。あらゆるエリート、あらゆるトップの人間さえも、デジタルの眼から逃れることはできない。

▽ 「決定的なのは」に注意。▼ A || B. ▼ notA, but B. 決定的なこと || あらゆる人間がデジタルの眼の監視下にあること。次の文参照。

● かつての権力なら、テクノロジーを握る者が人々を支配した。その支配する主体は人間だった。しかし、いまはあらゆる人間がデジタル・テクノロジーの傘下、配下にある。

▽ ▼ 変化。かつて ↓ 〈しかし〉いまは。

● そういう意味では、パノプティコンとは、誰も支配者がいないのにすべてが支配される、特権的に誰かが管理するわけではないのにすべてが管理されている、ということの意味しているのである。

▽ 一種の〈逆説的〉な状態。〈管理者がいない ↑ ↓ すべてが管理されている〉。思えば、ぶきみなSFのような世界だ。しかし、現実はそのなりつつある。

⑰ ● 従来の発想では、管理するものは人間だった。しかし、管理していると思っ

ている人間自身も強烈な管理の中に置かれているところが今日の状況である。

▽ ⑯の内容を敷衍（かえん）（キーワード）。46頁。主旨を押し広げて説明）。

● たとえば政治的トップであれ、法曹的トップであれ、メディア的トップであれ、身体を持った存在である限り、常にあらゆるチェックに遭遇する。そういう意味で、◆ 従来型の権力者という構造はなかなか成り立ちにくい。こういうことがすでに進行しているのは確かである。

▽ 具体例による理解。

問3 ◆「従来型の権力者」とはどのようなものか。

現在進行している権力者のあり方（常に監視されている）とは、対照的なあり方を指しているはずだ。「かつての」あり方について書かれている箇所を拾い出してみよう。「ある特定の人間がその支配者になっている」「かつての権力なら、テクノロジーを握る者が人々を支配した」「特権的に誰かが管理する」。これらのことばを利用してまとめる。「トップ」とか「テクノロジーの支配」といった具体的なことばより、より普遍的な抽象的なことばで記述する方がうまくいく。

【解答例】監視されることなく、特権的に他を支配する人間。

⑱ ●それにしてはかたがたの構造では、隠れた権力、闇の権力があつたはずだが、それさえもすべてデジタルの眼によって監視される、そういう構造の中にあるのだということである。

▽具体例による理解。

⑲ ●「監視するもの」対「されるもの」という二項図式が、◆「どうも崩れゆきつつあるようだ。パノプティコンといえば、あたかも権力者がテクノロジーを使って人々を支配するというイメージになりがちだが、これは違うのだと思う。支配していると思っている存在も、実はパノプティコンの下にいたのである。」

問4 ◆「どうも崩れゆきつつある」のはなぜか。

★問いの変換。「監視するもの」対「されるもの」という二項図式の崩れとは、どのような状態をいつているのか、と、問い直す。そうしないと、「時代の変化の原因」まで答えたくなってしまうだろう。例えば、「科学技術が発達したから」とか。そうではなく、こういう場合問われているのは、もっと直接的な（状態）なのだ。これが「国語の問い」のお約束。

「監視する／される」の崩れについては、繰り返し述べられていた。

「いまはあらゆる人間がデジタル・テクノロジーの傘下、配下にある」

「管理していると思っている人間自身も強烈な管理の中に置かれている」

「それ（闇の権力）さえもすべてデジタルの眼によって監視される」

「支配していると思っている存在も、実はパノプティコンの下にいる」

つまり、監視していると思っている者も、例外なく監視されている、のである。だから、固定化した「二項図式」は立てられない。

【解答例】監視していると思っている者も、例外なく監視されているから。

※どこまで書くか、の問題。解答例の部分は必須。あとは、ここに至るプロセスをいくらでも、この前に付け足すことが可能だ。「デジタル・テクノロジーが発達し…」「権力者・監視者もその身体を監視され…」。妥当であれば、それらが含まれていてもいい。しかし、今、練習してほしいのは、必須の部分を押さえる、ということだ。

⑳ いずれにしても、今日、〈デジタルの眼〉は、×私の意識や意思を置き去りにし

たまま、○私の身体と交通し、関係を結んで、×「主体的な私」をないがしろにしつつ、○「身体Ⅱモノとしての私」こそ〈私〉と見なすような、そんな流れを着々と形づくっているのである。

▽ここまで追跡してきた眼には、描こうとしている情景がよくわかるだろう。では、「身体Ⅱモノとしての私」こそ〈私〉と見なす、二十一世紀のこの情景に対して、書き手はどういう判断を下しているのだろうか。途中にもあったように、筆者は、この事態を描き出しはいるが、たんによいとも悪いともいつてはいない。ただし、私が疎外される、といった表現には、否定的なニュアンスが漂っている。また、⑬では「失われていく私」の復活が明確に主張されている（最終的な主張ではないが）。

■読解問題の解法

1 「二十世紀的な発想」(⑥)とはどのような発想か、説明しなさい。

解答は、大きく二種類に分かれる。まず、ひとつめ。以下の傍線部の指す内容をすべて同一と見なす場合。

⑥ ●もし【読解1】二十世紀的な発想の枠内にとどまることができるならば、それは次のような発言になる。【疎外してきた身体のことを耳を傾けよう。神経系拡張のネット時代において、身体を置き去りにしてはならない。生命としての身体をないがしろにすることで、仕返しされるのだ。心身二元論を超えて、失われた身体と私との調和が図られなければならない、云々、云々。】これがおそらく二十世紀的な、私と身体をめぐる発想の枠であった。（これはこれでもちろん達成・実現されているわけではないし、これは引き続き充実されていかなければならない。）

【内】内の主張がその内容になる。〈☆指示内容・同一内容をたどる〉ことで、説明すべき内容を確定する。次に〈☆まとめ方〉が問題になる。「身体」を鍵として、「身体を疎外してきた」「身体を置き去りにしてきた」「身体をないがしろにした」「身体と私の調和を失ってきた」という表現を書き並べる。これらの表現を利用して、それを反省して、逆に「身体を重視しよう」という主旨を組み立てる。

【解答例1】「意識を重視し、身体を軽視してきたことの反省に立つて、これからは身体を重視しよう」という発想。」

もうひとつ。この「発想（の枠）」を、「二十一世紀的な発想」との対比として、「解答例1」で見た主張の前提となる発想と考える場合だ。「二十一世紀的な発想」とは「身体による私の疎外」だった。「二十世紀的な発想」はその逆、「私による身体の疎外」だけを指していると考えられるわけだ。⑧段落にあるように「デカルト以来二十世紀にいたる」発想全体と考えれば、そうなる。「私」と「身体」を☆切り身にして、いいかえる。

【解答例2】「意識を重視し、身体を軽視してきたこと。」

【解答例3】「私とは私の意識のことであり、身体はその私とは切り離されたものとして軽視する発想。」

【補論】反省の主張を入れるかどうかで答案例が分裂してしまう。これは設問としてま
ずい。しかし、諸君は自分がどのように自覚的に答案へのプロセスを歩んだか、を問題
にしてほしい。異なった答案を見たとき、自分の答案の妥当性を議論できるか。
深く考えたい諸君へ。二つの分裂を統合した、四つめの答案も可能だ。

【解答例1】は、よく見ると、ある発想の枠内で考えられた一つの「反省」である。
その発想・枠組みそのものへの批判ではない。この発言に潜んでいる根強い発想の枠と
は何だろうか。——それは、反省しているようであるがそこから離れられていない「意識
中心主義」の発想である。
別の例を挙げておこう。

「西洋を重視し、それ以外の世界を軽視してきたことの反省に立って、これからは非
西洋も重視しよう」とか「男性だけを重視し、女性を軽視してきたことの反省に立って、
これからは女性も重視しよう」とかいうとき、ここで反省しようとしている主体は、や
はり、従来からの中心である西洋であり男性なのである。

同じことを意識と身体の関係で表現するなら、
【解答例4】「あくまで私の意識を中心に置き、私の意思によって、軽視してきた身体
と意識の調和を図ろうとする発想。」

といえるだろう。つまり、意識によって解決できるという発想である。しかし、「意識
が解決できない事態が起きつつある」と議論は続いていくわけだ。

以上、4種類の例を挙げたが、解答を点検するには、元の「二十世紀的な発想」の部
分に文言がうまく適合するかどうかあてはめてみるという。最低限必要な要素は「私の
意識を中心とし、身体を軽視する発想」という部分である。それが中心に含まれている
かどうかを見よ。

⑩は⑥の繰り返しなので、その「意識中心のデカルト的な私においては私の意思のほ
うが重要」という表現を使い、「意識中心の私こそ私であり、私の意思のほうが身体よ
り重要だとする考え」といった答案も可能。

2 「デジタルの眼と合体した私の身体は、私を結果的に疎外していく」(⑩)とはど
のようなことか、説明しなさい。

★切り身の方法。「デジタルの眼と合体した私の身体は／私を／結果的に疎外してい
く」と〈切り身〉にし、各部分をいかえていく。

「デジタルの眼と合体した私の身体は」↓⑧によりかみ砕いた表現がある。「デジ
タルの眼を通して見られた私の身体は」

「私を」↓⑩の中から「意識中心のデカルト的な私を」
「結果的に疎外していく」↓疎外のいかえ。私を軽視し、私を「支配する⑫」「そ
の主導権を握る⑬」「監視する」「管理する」などが使える。

【答案例1】「デジタルの眼を通して見られた私の身体は、意識中心のデカルト的な
私から主導権を奪いそれを支配していく、ということ。」

いくつかのバリエーションが考えられる。「デカルト的」を省いたり、「データベー

ス」というキーワードを補足したりすることもできよう。

【答案例2】「デジタルの眼を通して見られたデータベースとしての私の身体は、意
識としての私から主導権を奪いそれを支配していく、ということ。」

3 「まったく別の位相のもの」(⑬)とはどのようなものか、説明しなさい。

★傍線部延長術。「別」とあるが何と別なのか。傍線部を前後に延長して考えないと
いけない問題がよくある。この問いは「従来の身体をめぐる諸問題とは、まったく別
の位相のもの(Ⅱ問題)」とは何か、という問いになる。「従来の問題」のほうは既に
考えた。では、それとはまったく違う問題とは何か。かつてなく、いま起きている決
定的な事態とは何か。⑬↓⑭↓⑮↓⑯段落とたどっていくと、「問題」の中心が⑯に
現れているのに気づく。「しかし」というサインに注目すれば、⑯の中心文は、「いま
はあらゆる人間がデジタル・テクノロジーの傘下、配下にある」という部分だとわか
る。「あらゆる人間がデジタル・テクノロジーの配下にある」という問題。」を答案のへお
さえ」とする。★答案はお尻から作れ。「かつて・いま」の対比を組み込んでもいい。
「かつて」の問題として、「意識が身体を支配する」「特定の権力が人々を支配する」
というものがあつた。「そうではなく、あらゆる人間の身体がデータベース化されて
いる」といった表現が可能だ。

【解答例1】「意識が身体を支配したり」(特定の人間が一方的に他を支配すること
が不可能になり)あらゆる人間(の身体)がデジタル・テクノロジーの監視装置によ
って支配されつつあるという問題。」

【解答例2】「あらゆる人間が、デジタル・テクノロジーの監視装置によって記録蓄
積されたデータベースとして、支配されつつあるという問題。」

■ 論述への挑戦

問。この文章が指摘しているような権力の構造についてどう考えるか。八百字以内で
論述しなさい。

▽まず「この文章が指摘している権力の構造」の本質を簡潔に提示しなければならな
い。その上で、問題を立てる。立て方はいろいろありえるが、書き手の指摘している
ような事態を自分なりに実感できる例を見つけて、手がかりになるのではない
か。安易に解決策を提示できるような主題ではないと思われるが、この行き着く先を
想像して、警鐘を鳴らしたり、別の可能性を指摘したりすることはできなくはないだ
ろう。

【読書案内】東浩紀『一般意志2・0——ルソー・フロイト・グーグル』講談社・二〇一一年

データベースによって可視化された無意識によって統治をおこなう未来、が論じられる。